

# 那珂川町図書館

## オススメの1冊

『「本をつくる」という仕事』

稲泉 連／著 筑摩書房 【O22 11】

どの本を読もうかなと書架を眺めていて、この本の背表紙を見た時、タイトルが気になって手に取りました。「本をつくる仕事」という言葉で思い浮かべたのは、著者、編集者、本のデザインを考える人、少し前にドラマで話題になった校閲くらいでした。

この本は著者が実際に本をつくるにあたって関わった人に話を聞いた内容と、それを聞いて感じたことをまとめた本です。

初めて知ることばかりでしたが、なかでも最初の活字書体のお話がとても興味深かったです。

本を読む上でなくてはならない文字。けれども、とても重要な存在なのに、当たり前のように感じていて注目したことはありませんでした。「ニュースを伝えるアナウンサーの声が重要であるように、書体は声なのですね」という言葉が本文にありました。確かに文字の書体でイメージが大分変わってきます。例えばこの本のタイトルも丸い書体だからこそ、私は「お！これなら読めそう。面白そう」と思えました。けれども、この書体がもし明朝体など硬い書体であれば「なんだか難しそうな本だな」と読むのを諦めてしまうかもしれないからです。言われてみれば同じ出版社から出ている本でも、様々な書体があります。それぞれの作品にあった文字が選ばれていて、それも含めてデザインなのだなと感じました。

また、出版社で独自にある書体を、デザインし直した人のエピソードも挙げられています。その書体とは大日本印刷の秀英体です。一つひとつ書体を考えていくのはとても根気のいる作業で、せっかくできた！と思って出来たものを並べていくと、なんだか右に寄っていたり、上に寄っていたりしたそうです。

パソコンで何気なく選ぶ書体もこうした方々の努力の結晶だと思うと、何気なく使っていたことに申し訳なくなり、もっと大事に使おうと思いました。

他にも活字書体、製本、活版印刷、校閲、紙、装幀などそれぞれのプロの話が紹介されています。彼らの人柄も伝わり、どんな人がどれだけ心を込めて仕事をされているのかがわかります。この本を読んで、本をつくる、本に関わるプロの情熱を感じて見ませんか。

那珂川町図書館（いちご大福）